

---

# Feeling of the Dog

挟間 猩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Feeling of the Dog

### 【Nコード】

N1266E

### 【作者名】

挟間 猩

### 【あらすじ】

両親が死んでしまい、遺産で金持ちになってしまった以外は普通の高校生だった少年。一人暮らしをしていたがある日友人に誘われて犬を飼うことになった。そして彼の生活に転機が訪れる。犬と階段から落ちたとき、彼の魂は犬の中に入ってしまったのだ。何とか自分の体に戻ることができたものの、それからは不定期に犬へ乗り移る特異体質(?)になってしまった。犬を通して人との触れあいを描くラブコメディ、更新が遅くなると思いますがよろしくお願いします。

## ブローグ

目が合った。動物界の基本の中に目をそらした方が負けというのがあるって聞いたことがある。

だけど何でこんな状態になったんだ!?

### 数時間前

暇だ、特にすることもない。一戸建ての家に一人で暮らしてるから掃除とかはしなきゃいけないんだろうが面倒でやってられないし…… やっぱり暇だ。

今日はバイトも入ってないずっと寝てるか、そう思って布団を敷く。

ピンポン

「たたく人が寝る準備をし終えたときに……そう考えながらも玄関に行く。」

「はい、どちらさんで?」

返事をしながらドアを開けると、友人の芳田<sup>よしだ</sup> 慎<sup>しん</sup>が立っていた。無言で開けたドアを閉める。

「ちよと待て! おい睦月<sup>むつき</sup>ドアを閉めるな、話くらい聞け!」

「つたくなんだ、休みの日は寝るかバイトの二択しかないんだよ」

「お前なあ……昨日の約束忘れたのか?」

約束……なんかしたっけ?

「そんなものしてない」

「なっ酷くないですかそれは!?!」

人の家の前でぎゃーぎゃーと煩い、道を行きかうオバサマ達が変な目で見てるだろ、近所迷惑だ!

「昨日ペットショップに行くって言ったじゃないか!」

「……ああ、そんな事もあったかもしれない」

うん、放課後にそんなこと言われた気がする。何でも親の遺産＋バイトの稼ぎで金があるのに金を使わない俺がむかつくとか……それで無駄遣いはいやだと反論してたところ一人は寂しいだろうからペットを飼えと説得されたんだっけ。ちなみに両親は数年前に事故死している。

「思い出したならいい。さあ通帳を持って銀行へ行くぞ！ 十五万もあれば血統書付きの犬猫が飼える！」

なんでこいつがこんなに興奮してるんだ？ しかも犬ってそんなに高かったのか……預金は一億以上あるから別にいいけど。

こうして俺達は銀行で金を引き出しペットショップへ向かうことに、途中通帳の額を見た慎がいきなりキレて殴り掛かってくる事件もおこったが振り返りにした。

ペットショップに着くとケージに入れられた動物がたくさんいた、いろんなところから鳴き声が聞こえてきて少しビビったぜ。

とりあえず見るのは犬、室内で飼いたいから小型犬だ。小型の犬がいるところに行くと俺でも知ってる犬がいた、でも……ドーベルマンって小型犬だったか？

目の前でかわいらしく座っているのは番犬でおなじみのドーベルマン、生まれて4カ月しかたっていないから小さいけどあれって大型犬だろ！

頭の中で悩んでいるとそいつと目が合った、澄んだ瞳でこっちを見ってくる。

どうすればいいか悩んでいると慎が声をかけてきた。

「お、ミニピンじゃないか。お前も案外いい趣味してるんだな」

「ミニピン？ 俺はドーベルマンが何で小型犬の所にいるのか悩んでただけだ」

「ミニピンを知らないのか！？ ミニチュアピンシャーっていうドーベルマンをちっちゃくした犬何だけどさ、小鹿みたいに歩くから

女の子にも人気なんだぜ！ それを狙ってるんじゃないのか？」

こいつは女の子受けする事しか考えてないのか……でもかわいいのは認める。値段はメスで十二万円……高い。オスの方が安いらしいけどいいみたいだ。

「お客さん、その子が気に入ったんですか？」

横から優しそうな女の店員さんが声をかけてきた。

「ええ……でも高いから考えてたんです」

「あら、お客さんかつこいいからお安くしますよ」

となりで口笛を吹く慎、後で殴る。

「そうねえ、十万円ですですか？」

「十万ですか！？ それって安すぎじゃ……」

「いいのよ、可愛がってくれる人を買ってもらえば私は満足」

「それじゃ、買おうかな」

「ありがとうございます、かわいがってくださいね！」

その後支払いを済ませるときに店員さんからアドバイスを受け、トイレ道具からドッグフードまで必要そうなものを買った。

犬はダンボールの中に入れてもらい俺が運ぶことに、後のものは慎に持たせた。

「それにしてもかわいいな……」

横から覗き込む慎、今はダンボールの中で眠っているがその姿がまた愛らしい。

とにかく、家に帰ってこいつの寝る場所とか作ってやんないとな。慎の顔を見ていたらペットショップで口笛を吹いていたことを思い出し、一発殴ってからその日は家に帰った。

## 第1話：名前をつけよう

家に帰り、自分の部屋に着いてダンボールを下ろす、その衝撃で目が覚めたのか子犬がこつちを見上げてくる。目が合うと尻尾を振り始めたが……出してやった方がいいか。

ダンボールから出してやって床に下ろすと興奮しているらしく、鼻をふんふん鳴らしながら床を嗅ぎまわっている。部屋の中は俺の着替えとか出かける前に敷いた布団でごちゃごちゃしてるけどこいつから見たら十分広いんだろうな。

それと、いつまでも犬って呼ぶわけにもいかないし名前を決めなきゃいけないか。何がいいか……俺と同じような名前にすればいいのか？ だとしたら睦月に近い……月とか陸リク、でもこいつはメスだから陸は駄目だな。それに名字と語呂が悪いのは避けたい。

そう考えていると子犬が部屋の隅で体を震わせていた。

まさか……そつと覗き込んでみると、そこには小さな水たまりができていた。さつそく漏らしやがったな！？

そばに置いておいたティッシュを急いで水たまりに押し付け吸い取る、ここで拭き取ろうとすると広がっちゃって大変なんだよな。

「だめじゃないか、トイレはそこだ！」

いや、言っても理解できないか……そう思っていると子犬はトイレの上に歩いて行き、今度はちゃんとトイレでした。こいつ天才なんじゃないか！？

「おお、すごいぞ犬！ お前は天才だ！」

とりあえずさつき使ったティッシュをトイレで流そうと部屋を出る、部屋のドアを閉めておけば外には出ないだろう。

二階にある部屋からトイレに行くのは面倒だ、なぜトイレは一階にしかないんだろう。愚痴を言いながらもティッシュを流して部屋に戻る。

「ただいま……って、いない！？」

部屋の中が散らかっているとはいえ子犬が見当たらない、布団の中に潜って寝てるのか？ 布団をめくってみたがいない。

考える……まずこの部屋の中にいるのは間違いない、そして隠れる場所は限られている。部屋の中にあるのは布団、机と椅子、着替えの山、子犬の寝床用に買ったバスケット、そして犬を入れてきたダンボールだ。

まず布団の中にはいなかった、そして椅子の上には登れないだろうから……下か！ 机と椅子の下を覗き込んでみるがここにもいない。

残るは三か所、ダンボールは自力じゃ入れないだろうしバスケットの中にはクッションとタオルが入ってるだけだ。つまり……

「ここだあ！」

叫び着替えの山を崩す、崩した衣類を持ち上げて片づけながら探す、面倒だ……崩さなければよかった。

だが、ここにも……いないだ！？

奴はどこに行ったんだ、この限られた空間の中で奴はもう俺の死角を発見したのか！？

俺がパニツクになりつつも部屋の中を見回しているとバスケットの中が動いたように見えた。だけどバスケットにはクッションしか入っていないはず……！！

クッションの下、そしてタオルに隠れて見えなかったがそこで子犬は寝ていた。ペットシヨップでもらったタオルだが、それには今まで嗅ぎなれた香りだから落ち着くと言ってたっけ。

初日から心配させるなよな………そういえば名前考えてたんだっけ。今は十月、そうだカンナなんてどうだろう。神無月だし、でも神無じゃ縁起が悪いしな……神奈なんてどうだ？ けっこうかわいと思うし。

「うん、今日からお前は神奈、椎堂<sup>ういどう</sup> 神奈だ」

優しく頭を撫でてやったら軽く身じろぎして頭をタオルの中に隠した、まさに頭隠して尻隠さず。

今日は疲れたし俺も寝ようかな……明日も日曜だから休みだし。  
まだ寝るには早すぎる時間だけどまあいいだろう、晩飯作るのめんどいし。

布団にもぐりこんで神奈を見る、相変わらず静かに寝ていた。

「これからよろしく、そしておやすみ神奈」



## 第1話：名前をつけよう（後書き）

よろしければ評価、感想をよろしくお願いします

## 第2話…ご飯をあげよう

朝起きたとき、布団の中……下半身が異様に暖かくて飛び起きた、そんな経験無いですか？ 椎堂 睦月です。

今朝起きたとき下半身が生暖かくて飛び起きたんだが、そこには丸くなった神奈がいた。きつと寝てる時に潜り込んだんだな、べつに漏らしてるわけじゃないし、まあいいか。

神奈が寝てるから起こさないように布団を抜け出す、今日は日曜だから学校もないし寝ていたいがいいつのご飯を準備しなきゃいけないしな。

着替えてキッチンに行くと昨日ペットショップの店員さんに習った方法でペットフードをお湯でふにゃふにゃにする。子犬用離乳食の完成だ。

ピンポン

「たたく昨日と言い今日といい何で休日なのに人が来るんだ？ まあ仕方ないし玄関に行く。」

「はい、どちらさんで？」

「あ、睦月君」

扉を開けた所にいたのはお隣さんの麻木 紗耶、同じ高校に通っていてクラスもいっしょ。時々遊びに来るんだが部屋の片付けとかをしてくれるいいやつだ……エロ本が見つからないかひやひやするけどな。

「今日はどうかしたのか？」

「えつとね、昨日芳田君と二人でいろいろ買ってくるのが見えたから散らかってないか心配になって」

母親みたいなやつだな……だが今日は布団も片付けてないし着替えの山も崩れたまま、反論できない。

「ふふふ、その顔は図星みたいだね。片付けてあげるから朝ごはんでも食べてて」

そういつて勝手に家にあがると俺の部屋に行ってしまう、今キッチンにはドックフードしかないのに……

仕方ないから神奈が起きてくるのを待ちつつ朝食を作る、面倒だし目玉焼きでいいか。

フライパンを熱しながら油を伸ばし、卵を準備する。フライパンが十分に熱くなったところで卵を投入、片手で割るのがコツだ。

鼻歌を歌いながら料理を続ける、焼き上がり皿に移すと部屋の方から悲鳴　奇声が聞こえてきた。

「ぬゝ、ぬぬぬぬぬいぬぬ！」

「ど、どうした!？」

急いで部屋に行くと紗耶が神奈に追われて部屋の隅で震えていた、神奈は興味津々と言ったところで紗耶に近づくが紗耶は怯えて逃げようとしている。紗耶って動物苦手だったのか？

「紗耶……なにしてるんだ？」

「睦月、助けてゝ狂犬が襲ってくる。食べられちゃうよ!」

おいおい、子犬が近づいてくるだけで普通泣くか？　腰が抜けたのか這いずりながら近づいてくる。

「神奈、こいつは紗耶っていうんだ。虐めちゃだめだぞ?」

声をかけると可愛く首をかしげた、可愛すぎる。思わずこいつの味方になりそうだったぜ。

怯えてる紗耶に部屋のことを頼んで神奈を抱えるとキッチンに行く、神奈を連れていくとわかると両手をあげて紗耶は喜んでたけど飯食ったら戻るっての考えてないな。

「んじゃ、いただきます」

俺は焼いておいた食パンと目玉焼きにかぶりつく、目玉焼きは醤油に限る、ソースとかは邪道だ。

俺が食い終わっても神奈ははぐはぐと頑張って食べている、見ていて思わずにやけてしまったぜ。

神奈が食べ終わったら部屋に戻る、布団や服も畳まれて綺麗になっているがバスケットだけは手付かずだ。犬に関するものは触りたくなかったんだな。

「あ、睦月片付け終わったよ、それとその犬……どうしたの？」

「ああ、神奈か。昨日ペットショップで買ってきたんだ、ミニチュアピンシャーって犬種らしいけど可愛いだろ」

一度神奈を見てからブンブンと頭を振る、やっぱり駄目なんだな

……

「か、片付けも終わったし私帰る！　じゃあね」

それだけ言つと一目散に玄関へ走る、扉を開けると一度だけこつちを振り返り紗耶はいなくなってしまった。忙しいやつだ。

神奈は何が起こつたのか理解できていないんだろうし気にもしていないんだろう、リビングのソファで寝ている。子犬は一日中寝てるんだな。

さて、明日は学校だし神奈が寝てる間に課題を済ませておこう。

### 第3話：学校へ行く

今日は月曜か……休み明けは学校に行くのが嫌になるよな。

布団の中で寝ていた神奈も伸びをしながら這い出て来る、そこで寝るならバスケットは必要なかったか？

神奈が完全に布団から出てきたら急いで布団を畳み制服に着替える、いつまでも布団を敷いておくとつい倒れこんで寝ちまうからだ。

神奈の朝食は例のふにやふにやドックフード、俺はトーストを焼いて食べる。今回は神奈の方が食べ始めてからトーストを焼いたから食い終わった神奈が下からこっちを眺めてくる。

むしゃむしゃとトーストを齧る俺の口元を食い入るように見つめ、時々パン屑が落ちるとそれを舐めるために椅子の下をちよこちよこ動き回る。かわいいけど落ちた物を食べるな、病気になる……って言ってもわかんねえんだろうし、今度床を舐めれるくらい綺麗にしてやろう。気が向いたら。

俺も飯を食い終わったから神奈を連れて部屋に戻る、時間を見れば短針が七、長針が九を指していた。これなら余裕で間に合うだろう。

だけど途中のコンビニで昼飯買わなきゃいけないし余裕をもって登校する方がいいか、神奈には悪いが少し長い間留守番をしていてもらおう。

「神奈、俺は学校に行ってくるからいい子にしてるんだぞ？ 水はそこに置いといたし、おもちゃもその籠の中に入ってるから」

一つ一つ指をさしながら説明する、神奈もつられて指を見るがあくまで見ているのは指みたいだな。仕方ないから抱っこして一つずつ見せてからバスケットに神奈をおろす。

「んじゃ、いつてくる」

扉を閉じるときバスケットに座っている神奈と目が合った、そん

な目で見られたら出かけられないじゃないか。急いで玄関の鍵を閉めて走りだす、後ろ髪を引かれるってこういうことを言っただろうか……

コンビニまでの数百メートルを全力で駆け抜けたので、息を切らせながらコンビニに入る。う……周りの視線が痛いぜ。

弁当用にタマゴサンドイッチと焼きたらこのおにぎりを籠に入れる、さつさと金を払って学校に行こうと思ったが雑誌コーナーに今日発売の週刊誌を発見、時間に余裕もあるし読んでから行くか。

集中して読むこと十数分、読み終わった俺は会計を済ませるべくレジに行く。しかしその時レジの上部にある時計が目に入った、指し示す時間は八時二十六分。学校の門限は八時二十五分……遅刻だ！

急いで会計を済ませて走る、なんか今日は走ってばっかだな。足が痛いのが気にしちゃいけない、遅刻すると煩い奴がいるからな……

立ちはだかる坂道をスピードを落とさずに走りぬける事は不可能、だが可能な限りのスピードで登りきる。そして山頂に位置する春花学園の校舎が見えてきた、ラストスパートだ！すでに息をするだけで痛みを感じる肺や震えている足に喝を入れ必死に走る。

学校の門をくぐった時は既に八時三十三分になっていた、くそっ週刊誌二冊も読むんじゃないかった！とにかく急いで靴をはきかえ教室へ急ぐ、何で教室が三階にあるんだ、遠いんだよ！

教室の扉を勢いよく開け一步を踏み出す。

「ぜえ、ぜえ……すいま、せん。おくれ……ました」

「遅いぞ、椎堂！ 貴様はそれでも生徒としての自覚があるのか！」  
オールバックにサングラス、そして黒スーツ常備の担任教師義岡<sup>よしおか</sup>隆<sup>たかし</sup>。平凡な名前からは考えられない異常な恰好が人気の教師だ。

「犬を飼い始めたん、ですが。その世話に……戸惑って遅れました」  
息も絶え絶えに説明する、くそっ遅刻に厳しい吉岡さんにこの言い訳が通用するか！？

無言で近づいてこないで、お願い。俺の目の前までゆっくりと進んでくると、サングラスから一筋の涙が流れた……は？

「椎堂、遅刻覚悟で犬の世話か……自らを犠牲にしてまで尽くすその愛。感動だ！」

手を荒々しく振って感情表現する吉岡さん、これは許してもらえたのか？ 俺を褒め続けている吉岡さんに軽く会釈して席に着く、怒られなくてラッキー

「ちよつとあなた、遅刻した本当の理由はなんなのよ。動物を言い訳にするなんて……」

席に着いた瞬間、隣から煩い声が聞こえ始める。そうだ、吉岡さんを交わすことができてこいつがいるんだった。

大手医療メーカー桜居の社長令嬢、桜居さくらい 琉璃るり。平均的な身長・体型の紗耶に比べ背は小さく胸も小さい、そのくせ態度はでかい、まさにおこちゃまだ。長い髪は手入れをしていると言っていたが輝くような黒髪だ、長いから髪洗うの面倒だろうな。

こいつはいつまでも文句を言い続けるので無視するしか手はない。

「ちよつと聞いているの！？ 反応しなさいよ！」

無視無視、一通りのリアクションを終えた吉岡さんが乱れたスーツを直しているうちに授業の準備だ。

「犬……飼ったんでしょ？ 犬種くらい教えなさいよ」

さっきまでとは比べ物にならないくらい小さな声で聞いて来る琉璃、まさか相手にされなくて拗ねてんのか？

「拗ねるなチビ、確かミニピンって犬種だ。煩いから少し黙ってる」  
「……ミニピン」

呟きながら少し顔を赤らめる琉璃、こいつが顔を赤らめるところなんて初めて見たぞ。

それから午前の授業は寝て過ごし、午後は主に『子犬の育て方』って本を読んだ。羨は子犬のうちにやっとなきやいけないからな。

帰りのショートホームルームも適当に聞き流して帰ろうとしたときに琉璃が話しかけてきた、まだ文句を言い足りないのか？

「ミニピンは足が細いから骨を折りやすいの、注意しなさい」

「は？」

「べ、別にたまたま知ってたから教えてあげただけよ。あなたそういうこと知らなさそうだし、怪我させたらワンちゃんがかawaiiそうだし……あなたのためじゃなくてワンちゃんのためなんだからね！」

それだけ一気に言う走り去ってしまう、何だったんだ？ けどそのことは知らなかったし教えてもらえたのはうれしい。明日礼でも言っとくか。

とにかく、今日は帰って神奈と遊んでやろう。



#### 第4話：足下に気をつけよう

神奈の世話をするため慎からカラオケの誘いを断り、感動した吉岡さんが焼き肉を奢ってくれるというのを保留にして帰宅しているときに後ろから誰かに飛びつかれた。

「えへへへ、だーれだ」

普通こういうのって目隠しすんだよな、何でこいつは後ろから抱きついて来るんだ？……なるほど、背中に感じる柔らかな膨らみでだれか判別しろという俺への挑戦状か。いいだろう、この大きくもなく小さくもない胸。そして声のする位置からして身長はおよそ162cm、そこから推測される奴は一人しかない！

「紗耶、人通りの多いところで抱きつくなくて前にも言ったよな」  
背中から離れて俺の前に回り込むと、にこにこ笑って前から抱きつかうとしてくる。当然回避だ。

「あう、酷いよ睦月君。もうちょっとくらい相手してくれないと拗ねるよ！」

頬をふくらませて怒っても全然怖くない、むしろ台詞のせいで我儘な幼稚園児に見える。

「そつえば紗耶って犬駄目なのか？」

俺の目の前でギャーギャー騒いでいたが動きが止まる、その顔はだんだんと青くなっていく……大丈夫か！？

「犬……だめ、兎以外の動物は人間を食べようといつも狙ってるんだよ！？馬だって犬だって猫だって、愛想ふりまいていても心の中じゃ人間に攻撃する機会をうかがってるんだもん！」

こいつの頭の中じゃ動物が人間の敵になってるのか……どこのホラー映画だ？しかも兎以外って明らかに兎を見た目で敵から除外したたる！

「馬鹿な奴だな……そんな訳ないだろ？だったら今日家に来いよ、神奈が怖くないことを証明してやる。ついでに犬に慣れる」

「や、やだよ！ そんな事言って私を騙すつもりでしょ、睦月君はもう犬の手先になったんだもん！」

手先って……確かにあれだけ可愛ければこいつより神奈の方に味方するのは確かだ。

「とにかく、今日帰宅後三十分以内に家に来ること。来なかったら二度と家に入れない」

そう言っただけで走りだす、全てにおいて平均的な紗耶は当然俺に追いつけるわけがない。家に着くころには紗耶の姿は見えなくなっていた。

「ただいま」

部屋のドアを開ければ神奈が短い尻尾を激しく振りながら走ってくる、そんなに尻尾動かしたらとれちゃうぞ。

神奈が落ち着くまで体を撫でたり抱っこしたりしていたが、数分後にはぬいぐるみをはぐはぐと噛んで一人遊びを始めた。やっぱりこいつは利口だな。

さてと、紗耶が来る前に片づけねえとな。見られて困るものは神奈のバスケットに隠させてもらう、ごめん神奈。あとは部屋に落ちているゴミを捨てたり神奈が散らかしたおもちゃを一か所に集めておく。これでOKかな？

俺が片付けをしている間おとなしくしてたんだから神奈を褒めてやらないとな、だけど見当たらないう……どこ行っただ？ っとドアが開いてる！ まさか部屋から出たのか！？

慌てて部屋から出ると目に飛び込んできたのは階段をおりようとしている神奈の姿だ、すでに一段目に足を踏み出そうとしている神奈だけどおりれんのか？

そう考えていると神奈は上半身を一段目に下ろした、その反動で下半身が浮きあがる。その瞬間 琉璃の言葉が頭をよぎる。

『ミニピンは足が細いから骨を折りやすいの、注意しなさい』

っやばい！ 階段の上で一回転しようとする神奈に飛びつく、間

に合ってくれ！

空中で神奈を抱きしめる、俺がクッションになれば大丈夫だろう。ただ階段から落ちるのって怖いな……いつまでたっても地面に叩きつけられない、恐怖体験をするとスローモーションのように感じるって本当だったのか。

そんな事を考えていると首の後ろに激痛が走った、首の裏は洒落にならないぜ！？ それに続いて腕、腰、肩と痛みが襲ってくる。

やっと階段を落ちきったのか痛みが襲ってこなくなった、しかし生きててよかったぜ。だけど体が動かない、ちよつとやばいかもな……腹のあたりで神奈が動いてるのがわかる、無事みたいでよかったぜ。だけど俺は無事じゃないかも。

インターホンが聞こえる、ああ紗耶が来たのか……だけど俺は動けない。不法侵入していいから助けてくれー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1266e/>

---

Feeling of the Dog

2010年10月11日17時08分発行